

すべての戦争被害の解決を

空襲被害者は訴える

空襲被害者など民間人の「再びこの国を火の海にさせる戦争被害の解決を求めて せなために！戦後七十年



た歴史認識と戦争被害に対する姿勢を問い、政府は国策の誤りに責任を負うべきだ」とのべました。

東京、大阪、名古屋、長崎、沖縄の空襲被害者や被害者が体験を語りました。

名古屋市の杉山千佐子さん（九十九歳）は「逃げずに消火しろなどの防空法で

がんじがらめにされ、逃げられなかった。私は顔半分、片腕、足を失った。夕

飯は食べられるのだろうか？明日の朝は？という毎日。働かなくては食べてい

けず、職安（ハローワーク）では『そんな身体では働く所はない』と言われ続け

た。一番悲しかったのは、若い娘が顔を半分失ったこと。自分のせいではないのにその顔をさらさなければ

ならなかった悲しさと苦しさを。国はこれ以上犠牲者をほったらかしにしないで」と訴えました。

東京空襲犠牲者遺族会の星野弘会長（八十四歳）は「このままでは死ぬに死ね

ない。命ある限り全力を尽くす。力を貸してください」と呼びかけました。

副実行委員長の小林節慶応大学名誉教授は、まとめのあいさつで「今までこの

世界を知らず、人生観が変わるほどショックを受けている。多くの人に広げ、記録していかなければなら

ない」とのべました。私も空襲で父を奪われ家を失ったひとりとして、もう黙ってはいられないと思

いました。

・戦争被害のすべて解決を大集会」が三月六日、東京・浅草公会堂で開かれ、約八百人が参加しました。

高橋哲哉東京大学大学院教授は記念講演で「村山談話」にある「国策の誤り」に

触れ「政府が曖昧にしてき

ました。

（都庁支部）